認定医ケースプレゼンテーション抄録

スイングロックアタッチメントを用いた上顎顎欠損補綴の1症例

大谷 賢二

A Case of Maxillary Prosthesis with Swing Lock Attachment

Kenji Ohtani

I. 症例の概要

患者：男性，63歳（初診時）。

初診：平成元年12月15日。

主訴：上顎顎義歯の適合不良および咀嚼，発音，嚥下時の液体の鼻腔への流入等の機能障害。

現症：患者の残存歯は，上顎では 5+2，下顎では 6+7 であった。上顎左側 67 部に鶏卵大および大豆大の上顎洞と交通する骨欠損が存在した。欠損は歯槽部に限局し，軟口蓋の欠損はみられなかった。また，開口量は 1，I 間で 28 mm であり，2 は動揺度が II 度以上であったため，補綴装置の支台歯として使用に耐えうる歯は 6 本であった（図 1）。

現病歴：患者は，昭和 60 年に上顎左側に発生したエナメル上皮腫の切除手術を受け，その際に 3-7 の歯，歯槽骨および 67 部の上顎骨の一部を切除した。術後より顎義歯を用いるようになり，口腔内の変化に伴い初診に至るまでに数回再製作を行ったが，満足いく結果が得られず，当科で顎義歯の再製を患者が希望するに至った。

II. 診断と治療方針

現症より，診断名は，3-7 欠損および左側上顎骨欠損であり，上顎の欠損状態は，HS 分類では H_1S_0 D_2T_1 に相当すると考えられた¹⁾。治療方針としては，患者の主訴に対応するためには，残存歯に強固な支持

図 1 Appearances at initial appointment

A : Study cast ; B : Frontal view ; C, D : Before prosthesis

初診時の状態

A : スタディキャスト ; B : 正面観 ; C, D : 旧補綴装置

および把持を求めうる支台装置を用い，可及的に義歯の動揺を抑えた補綴装置を製作することが必要であると考えられた。

III. 治療内容

治療に際しての患者の希望が残存歯には可能な限り手を加えたくないとの理由により，維持装置にはスイングロックアタッチメントを用いた顎義歯を補綴装置として選択した。

前処置として，支台歯として不適切な 2 を歯槽骨の保護の目的で根面板形態とし，54 の全部鑄造冠の再製，および 1 のカリエス処置を行った後，補綴装置を製作した。補綴装置は，シリコンラバー印象材

図2 Making of prosthesis

A: Impression made of wax material; B: Altered cast; C, D: Final prosthesis

補綴装置の製作

A: ワックス印象; B: 改造模型; C, D: 完成補綴装置

を用いて残存歯部および健常顎堤部の印象採得を行い、スイングロックを含むメタルフレームを製作し、そのメタルフレームを用いてアルタードキャスト法にて上顎欠損部の印象採得をし、咬合採得を行った。補綴装置の上顎欠損部の形態は、手術担当医の依頼により、栓塞部を上顎洞交通部に挿入させない形態とした(図2)。

IV. 経過観察と考察

顎義歯は平成4年10月に装着した。機能面では患者の希望をほぼ満足させることができた。しかし、ブラークコントロールに問題のある患者であったため、義歯装着後6カ月ほどで支台歯である21の歯頸部のIバーの接触部位にカリエスが生じ、コンポジットレジンによる処置を行った。その後、良好に経過したが、義歯装着より4年6カ月後、4の歯根破折が生じたがメタルコアおよび全部鑄造冠の再製での対応が可能であった。以後、現在に至るまで補綴装置には特に大きな問題は生じておらず、経過観察中である(図3)。

また、鼻咽腔の閉鎖機能を口蓋裂患者に用いられる機能検査²⁾を応用して調べたところ、補綴装置装着時は非装着時と比較して機能的に大幅に改善されている

図3 Intraoral views at 7.5 years after treatment
術後7年6カ月後の口腔内

表1 Velopharyngeal function test
鼻咽腔閉鎖機能検査

				顎義歯非装着		顎義歯装着	
ストローを用いた Sucking		Sucking の可否		吸えない		上手に吸いながら飲める	
		液体の鼻漏出		—		—	
ストローを用いた Soft Blowing		泡立て持続時間		閉鼻/開鼻 10 秒/0 秒		閉鼻/開鼻 29 秒/26 秒	
		呼気の鼻漏出		+		±	
開鼻声		呼気の鼻漏出				閉鼻声	
		顎義歯					
音	無	有	無	有	音	無	顎義歯 有
/a/	±	—	±	±	/ma/	±	—
/i/	+	—	+	±	(/na/)	±	—
会話	+	—			会話	±	—
鼻漏出による子音の歪み		呼気の鼻漏出				鼻雑音	
		顎義歯					
子音	無	有	無	有	無	有	
/p/(/b/)	±	—	±	—	±	—	
/t/(/d/)	+	—	+	±	+	—	
/k/(/g/)	±	—	±	—	±	—	
/s/	+	—	+	±	+	—	
会話	+	—			+	—	

ことが判明した(表1)。

本症例より、スイングロックアタッチメントは、前処置において支台歯への侵襲が少なく、残存歯および義歯の固定効果が大であるうえに、口腔内の変化やトラブルに対する対応が比較的容易であることより、顎義歯への応用に適していると考えられた。

文 献

- 1) 松浦正朗, 野村隆祥, 瀬戸暁一. 新しい上顎欠損の分類法(HS分類)の提案. 顎顔面補綴 2: 15-21, 1979.
- 2) 福迫陽子, 伊藤元信, 笹沼澄子. 言語療法マニュアル 135-145, 東京: 医歯薬出版, 1984.